法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

【特集】文化芸術分野における大原社会問題研究所資料 ： プロレタリア美術運動と「左傾本」の装丁について

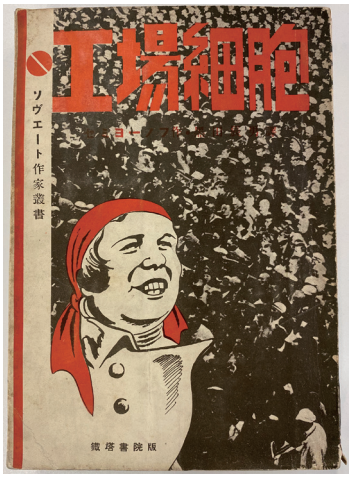
喜多, 孝臣 / KITA, Takaomi

(出版者 / Publisher)
法政大学大原社会問題研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌
(巻 / Volume)
779・780
(開始ページ / Start Page)
2
(終了ページ / End Page)
9
(発行年 / Year)
2023-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030412

プロレタリア美術運動と「左傾本」の装丁について　　喜多孝臣

①②③⑤⑨⑫⑬：法政大学大原社会問題研究所蔵

①　原哲夫
『鐘紡罪悪史』表紙
装丁：岡本唐貴



②　セミヨーノフ
『工場細胞』表紙
装丁：柳瀬正夢

③　リベヂンスキイ
『コムミサール』表紙
装丁：目黒生

④　グラトコフ
『セメント』表紙
装丁：永田一脩

⑤　ヤーコウレフ
『十月』表紙

⑥　永田一脩
『プロレタリア絵画論』表紙
装丁：永田一脩

⑦　『赤い恋』表紙
装丁：柳瀬正夢

⑧　『赤い恋』表紙
装丁：村山知義

⑨　エヌ・オグニヨフ
『ソヴエート学生の日記』表紙
装丁：岡本唐貴

⑩　『ソヴエート学生の日記』
裏表紙（部分）

⑪　『ソヴエート学生の日記』
本扉（部分）

⑫　エス・グリゴリエフ
『ソヴエート女教師日記』表紙

⑬　グミリヨフスキイ
『ソヴエート大学生の私生活』表紙
装丁：岡本唐貴

⑭　「新ロシヤ美術展覧会」ポスター
岡本唐貴デザイン（図版出典：『大正期新興美術資料集成』国書刊行会，2006 年）

プロレタリア美術運動と「左傾本」の装丁について

喜多　孝臣

1　「左傾」と「左傾本」出版
2　プロレタリア美術運動における装丁の位置
3　左傾本の装丁
4　世界社の「美装」左傾本

1　「左傾」と「左傾本」出版

キア・ミルバーン『ジェネレーション・レフト』（斎藤幸平監訳，堀之内出版，2021 年）によれば，近年，国際的な若者の左傾化の傾向が顕著にみられるという。この動向が生じた要因には，2008 年の金融危機以降，急速に広がった世代間格差があると本書は指摘する。

ここで注目したいのは，「左傾」という言葉にある。「左傾」は，原著の「Turn Left」あるいは「move to the Left」の訳語だが，直訳すれば「左折」や「左向」となるところを，本書は「左傾」と訳している。もちろん，これは，左翼思想への傾斜を意味するものとして，「左傾」という言葉が日本社会のなかで長い間使われてきたことによる選択だろう。

「左傾」が，そうした意で用いられはじめた時期ははっきりと示し難いが，批評家新居格の著書『左傾思潮』（文泉堂書店，1921 年）が出版されたあたりから，人口に膾炙するようになったものと思われる。新居の著書はヨーロッパにおける左翼思想と社会運動の諸問題についての解説と批評を主とするが，彼による造語が，日本の若者たちの間をマルクス主義が席巻した 1920 年代半ばから 30 年代初めの現象を示すのに用いられ，定着をみるようになった。

当時の若者たちの左傾の背景には，1917（大正 6）年のロシア革命と，その結果成立した世界初の社会主義国家ソビエト連邦があるのは間違いない。彼らはそこに硬直した日本の格差社会を改革する一つの理想を看取し，濃淡に違いはあるものの自身の価値観や行動を変容させていった。ミルバーンの著作のなかでも触れられるとおり，現在，思想の潮流の形成に大きく関与しているのは，ウェブサイトや SNS によるメッセージの拡散や交流である。では，ウェブや SNS のない「左傾」の始まりの時代においては，一体，どのようなメディアが広範な若者たちの価値観や行動に影響を与えたのだろうか。

当時の若者たちの左傾化の原因について，文部省学生部が二度の興味深い調査を行っている[1]。1931（昭和6）年に行われた調査は，266名の学生の手記告白などを対象に左傾化の原因を探ったものだが，181名の原因が明らかとなり，そのうち105名が「左傾文献ノ影響」を，41名が「プロレタリア文芸ノ影響」をあげた。1933（昭和8）年には，調査対象を拡大し，官公私立大学，高等学校，専門学校にあて，思想的理由による処分学生3,437名の左傾の原因を照会している。その結果，最多の原因は1,467名の「左傾友人，学業ノ感化」であるが，それに次いだのは「左傾文献ノ影響」と答えた524名，「プロレタリア文芸ノ影響」の232名である。「左傾文献」，「プロレタリア文芸」ともに書籍であり，当時の左傾化の原因には書籍が大きな役割を果たしていたことがうかがえよう。

本稿では，こうした「プロレタリア文芸」や「左傾文献」と呼ばれ当時広範な影響力をみせた左翼思想関係書籍全般を「左傾本」と総称したい。「左傾本」は，しばしば検閲により発売禁止となったが，書店にも並べられ，一般書籍とかわらず誰でも手に取れるかたちで販売されていた。1927（昭和2）年には，読者層の拡大を受け，左傾本の出版点数が顕著に増えたことが認められ[2]，「左傾本」出版に乗り出す書肆も数多く現れている。

「左傾本」出版元の主だったところを記せば，大原社会問題研究所編纂『日本労働年鑑』を出版していた同人社書店，『レーニン全集』を刊行した白揚社，河上肇の『貧乏物語』を刊行する弘文堂，『無産者自由大学』シリーズで名を馳せた南宋書院，有島武郎の親友である足助素一の叢文閣，共産党の幹部市川正一の弟市川義雄による希望閣，俸給生活者組合委員，労農党中央委員を歴任し無産運動の第一線で活躍する難波孝夫のマルクス書房，プロレタリア芸術運動の機関誌『戦旗』を発行する戦旗社があげられよう。また，比較的大手の出版社でも，例えば，円本ブームを巻き起こした改造社や1927（昭和2）年に岩波文庫を創刊し，読者に安価に書物を届ける岩波書店は，両社とも『資本論』を刊行するなど，左傾本出版の一翼を担っていた[3]。こうした書肆から発行された左傾本は，左翼思想への国家による弾圧が激しさを増す1930年代初頭までは飛ぶように売れたともいい[4]，青年の左傾化の裾野を広げていたのである。

2　プロレタリア美術運動における装丁の位置

昨今のデジタルメディアとは異なり，当然ながら左傾本は他の書籍と同様，色やかたち，重みや手触りのある書籍としての体裁を備えている。書籍では，読者はテクストだけを読むのではなく，表紙をながめ，手にとって重みを感じながら，一枚一枚ページをめくるという行為を通じて，紙に

(1)「昭和九年十一月 思想局要項」思想調査資料集成刊行会編『文部省思想局思想調査資料集成 第1巻』日本図書センター，1981年，260頁。

(2)「発売禁止に現はれた出版界の傾向」『東京朝日新聞』1927年12月28日朝刊，5面。

(3)「左傾本・風雲録」1～8，『読売新聞』1929年1月7日～9日，16日～18日，22日，23日（全て朝刊，4面）を参照。

(4)　新宿紀伊國屋書店創業者田辺茂一は，昭和初年の紀伊國屋書店で「叢文閣，白楊社〔白揚社〕，共生閣等の刊行パンフレットがとぶように売れた。」と回想している（田辺茂一「私の履歴書十六　女子店員」『日本経済新聞』1976年9月8日朝刊，24面）。

印刷された字を読むのであり，そうした読む行為全体から受ける印象がテクストに生彩を与えることもある。装丁は，手に取るきっかけを作るだけでなく読書体験の面でも看過できない要素である。こうした装丁について，左傾本には大衆への普及という共通の目的があるため，幾つかの傾向が見られるようだ。

左傾本の多くは価格が安価になるよう紙装による簡易な製本である仮綴本が最も選択された。仮綴本のなかでも小口や天地を裁断しないアンカット装，いわゆる「フランス綴じ」が多く見受けられる。日本で出版された「フランス綴じ」本を博捜した近藤秀實は，「フランス綴じ」がアナーキズムやマルクス主義に関する書物に広く用いられていたことを明らかにし，「知識階級向けの「モダニズム」の雰囲気を携えた，「恰好の好いもの」」である「フランス綴じ」が，日本に入った当初モダンな思想であった左翼思想にまとわせる装いとして選ばれたことを指摘している。近藤はこのことを「新しい思想は新しい装いをまとって来る」(5) と表現した。

こうした左傾本の装丁に「新しさ」を吹き込む仕事を自分たちの美術活動の重要な場の一つに数えていた美術家たちがいた。プロレタリア美術運動に参加する美術家たちである。

装丁の仕事は，それまでも多くの美術家たちが請け負ったが，絵画を本業とみなす彼らにとってはあくまで生活の糧を得るための手段であり，重要視されることは少ない。しかし，プロレタリア美術運動の美術家たちは，プロレタリア運動のなかで役立つ実践的な美術を指向した。絵画や彫刻といった展覧会で展示する美術作品だけではなく，彼らが「武器の芸術」(6) と呼ぶ漫画やポスター，挿絵，組合旗のデザインや統計図といった仕事を数多く手がけ，左傾本の装丁も「武器の芸術」の一環として重視されたのである。そのことは彼らの 1928 年から 1931 年における代表的な作例を「ほとんど全部集めた」「日本プロレタリア美術の全縮図」(7) であるとする『日本プロレタリア美術集』に装丁の仕事を紹介していることから，あるいは同書に 1929 年度の美術運動の拡大の例として，展覧会活動や機関誌の発行と並べて「左翼出版物への技術的参加」(8) をあげていることからもうかがえる。

明治以降，西洋から輸入され，国家制度に支えられ発展してきた「美術」という枠組みにおいては，展覧会に出品するオリジナルな一点ものの制作の重視が美術家の基本的な姿勢であった。そのなかでプロレタリア美術運動は，国際的な視野から「美術」のあり方を批判的に検討し，こうした複製メディアによって多くの民衆にメッセージを届ける制作にも展覧会に出品する絵画制作と同様の比重を置いた。国家制度によって生み出された制作ジャンルの優劣を実践的に無効化したところに，「美術」を揺るがす彼らの革新性があった。また，政治思想との密着から国家による弾圧を受けたことなどが原因で，プロレタリア美術運動には制作されたオリジナルの絵画がほとんど現存しない。そのため，かつては大量に存在した装丁の仕事も，時の経過とともに希少性がまし，今やこの運動の全貌を検証する上で絵画作品と同様の重要な位置を占めつつある。

---

(5)　近藤秀實「禁書の装幀――新しい思想は新しい装いを纏ってやって来る――日本におけるフランス綴じの歴史」『文様・デザイン・技術　2004』多摩美術大学文様研究室，2005 年，43 頁。
(6)　大月源二「プロレタリア美術の開花へ」『プロレタリア芸術』2 巻 3 号，1928 年 3 月，8 頁。
(7)　日本プロレタリア美術集 1931 年版編輯委員会「序」『日本プロレタリア美術集』内外社，1931 年，1 頁。
(8)　岡本唐貴「日本プロレタリア美術運動発達史の概観」『日本プロレタリア美術集』内外社，1931 年，128 頁。

しかし，装丁の仕事をたどることは容易ではない。書籍はテクストのみが重視され，表紙が取り払われ，改装されるなど，オリジナルの装丁に関心を持たれることなく，装丁者の名前も記録されることが少ない。これらの仕事を追うためには，実際に１点１点，左傾本を確かめるほかない。一部の画家の仕事を除き[(9)]，プロレタリア美術運動の美術家たちが装丁した左傾本については，その輪郭もほとんど摑めていないのが現状である。

ここからはその欠を幾ばくか補うべく，大原社会問題研究所所蔵本を中心に，プロレタリア美術運動の美術家たちによる左傾本の装丁をとりあげ，その特徴をとらえてみたい。

3　左傾本の装丁

まず，先述の『日本プロレタリア美術集』（内外社，1931 年）に紹介された作例のなかから見てみよう。

原哲夫『鐘紡罪悪史』（戦旗社，1930 年）の装丁はプロレタリア美術運動のリーダーの一人，岡本唐貴が手がけている（巻頭ｉ頁①）。本書は，当時，他の紡績会社に比し温情主義として世間に知られた鐘淵紡績，鐘紡（かねぼう）の，ある支店の職工たちの勤務の実態もまた悲惨であることを暴露するものだ。

その表紙には，工場の煙突と紡績機械の巨大な車輪状の部品を背景に，シルクハットをかぶった資本家の後ろ姿が描かれる。工場からは見えないが，資本家の両手は袖口まで真っ赤に染まり，血が滴り落ちている。血は労働者からの搾取の比喩表現なのだろう。資本家は，首をひねり，搾取の秘密を共有するかのように口角をあげて読者ににやりと笑いかけている。

本書は四六判の仮綴本。仮綴本は先述のとおり左傾本の典型的装丁である。表紙には，赤と黒の二色のみが使われている。赤と黒はボルシェヴィキとアナーキズムのシンボルカラーであり，左傾本を彩る色としてしばしば用いられた。脂ぎった戯画的な風貌に描かれる資本家と対比的に工場の機械の持つ直線や円の抽象的形態を描く構成は，資本家と労働者の関係を二分法的にとらえる彼らの世界観を示すものである。機械の描写には彼らが注ぐ工業生産や機械美への関心が表れている。

もう一点，同じく『日本プロレタリア美術集』で紹介されたセミヨーノフ『工場細胞』（黒田辰男訳，鉄塔書院，1930 年）は，プロレタリア美術のグラフィックを先導した柳瀬正夢による装丁である（巻頭ｉ頁②）。本書を刊行する鉄塔書院は，岩波書店から独立した小林勇の出版社であり，マルクス経済学者野呂栄太郎の『日本資本主義発達史』（1930 年）など左傾本を次々と刊行する書肆であった。

1925 年頃のソ連を舞台に社会主義国家建設に勤しむ共産党員の姿を描き出した『工場細胞』の表紙には，群衆を写した写真と対比的に，赤い布で頭を包む共産党員の女性が描かれている。写真を用いることであえて画家の個性を消した平板な群衆のなかにあって，描かれた女性は一際目立つ存在とうつる。

---

(9)　柳瀬正夢については，印刷物として発行した著作を網羅する全集が刊行され，装丁の仕事もたどることができる。柳瀬正夢刊行委員会編『柳瀬正夢全集』（第１巻～第４巻，別巻，三人社，2013 年～ 2019 年）を参照。

本書も四六判の仮綴本であり，赤が効果的に配置されているのも『鐘紡罪悪史』と同様である。表紙の端に引かれた一本の赤く太いラインを効かせる構図や，写真を効果的に用いる手法は，柳瀬がロシア構成主義から新たな造形言語を学んだことを示している。こうした従来の装丁とは一線を画すデザインがプロレタリア美術の装丁ではしばしば用いられ，左傾本が描く社会主義の新たな展望を彩った。タイトルの描き文字にも注目したい。訴えかけるような力強い描き文字は，柳瀬が得意としたものであり，多くの追随者を生んだ。

リベヂンスキイ『コムミサール』（黒田辰男訳，マルクス書房，1929年，四六判仮綴本）は，目黒生（本名：稲垣小五郎）による装丁である（巻頭ⅰ頁③）。目黒は，プロレタリア美術運動の古参であるが，先の二名に比べれば知名度が低く，現在では忘れられている。しかし，漫画やカットを得意とし，当時はプロレタリア文化雑誌や風刺漫画雑誌『東京パック』を中心に華々しく活躍していた。同時代に活躍した漫画家の森熊猛はその腕前を柳瀬に負けないものとして高く評価している[(10)]。

政治教育の学校を舞台にプロレタリアートの生活を描いた本書は，砂目模様を背景に鎌と槌，五芒星というソビエト連邦のシンボルマークが表紙いっぱいに大きく描かれる。本書も二色のみで構成されるが，おどろおどろしくもみえる黒の背景に対し，題字と五芒星にのみ赤が用いられている。さらに「コムミサール」の題字は立体的に構成され，浮き上がるように見え効果的である。こうした革命のシンボルをひき立たせ，あるいは単純化した工場や機械，労働者を記号的で力強く描く表現は左傾本の常套句であった。

社会主義リアリズムの記念碑的作品として知られるグラトコフ『セメント』（辻恒彦訳，南宋書院，1928年，四六判角背上製本）の装丁は，永田一脩が手がけた（巻頭ⅰ頁④）。ソビエト兵が銃を片手に闊歩する写真による全身像を中央に配し，周りには幾何学的なライン以外は一切何も描かずに画面を構成するこの構図は，プロレタリア文芸雑誌『戦旗』の表紙でも用いられている。画家の個性を封じ，フォトモンタージュを利用した美術家の新しい指向を感じさせるこの手法により，余剰を排除した簡潔で力強いデザインを実現している。先述の柳瀬の装丁もそうだが，写真の利用は彼らによる左傾本装丁の特徴の一つである。また，ここで見られる幾何学的ラインも左傾本の装飾としてしばしば用いられた。

本書は世界社会主義文学叢書の一冊であるが，あわせて同叢書からヤーコウレフ『十月』（井田孝平訳，南宋書院，1928年，四六判角背上製本）の装丁も見ておきたい（巻頭ⅰ頁⑤）。ロシア革命のさなかにおきる様々な物語を描いた本書の装丁には，水色と黒と白の色面を構成した抽象表現が採用された。フリーハンドによる直線や曲線，点描によるグラデーションを織り交ぜることで，二色という限られた色数の制約を感じさせない豊かな画面が生み出されている。

本書の装丁者は定かでないが，永田の可能性は大いにあろう。というのも永田は先の同シリーズの装丁者であり，同じく同シリーズのル・メルテン『藝術の唯物史観的解釈』（林房雄，川口浩共訳，1928年）のほか南宋書院では『戦争ニ対スル戦争』（蔵原惟人編，1928年）の装丁も担当して

(10)　森熊猛「稲垣小五郎の覚え書き」『漫画百年』18・19合併号，1982年12月，15頁。

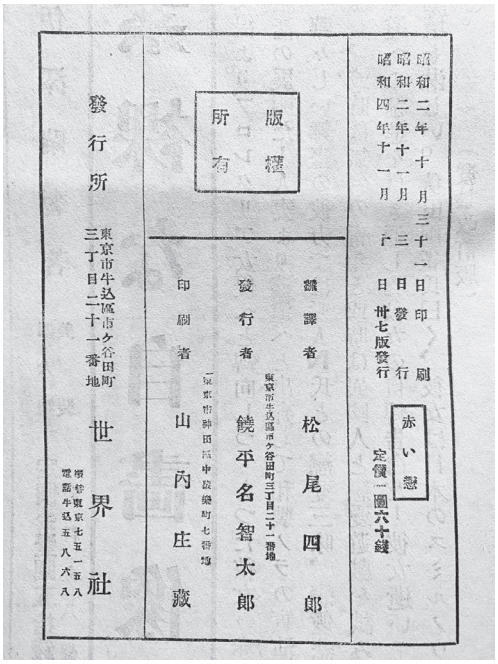
いる。また，永田は海外の美術動向に通じ，新たな表現を摂取する積極的な姿勢を有しており[11]，自著『プロレタリア絵画論』（天人社，1930 年）（巻頭 i 頁⑥）の自装でも抽象表現が用いられているからである。

4　世界社の「美装」左傾本

左傾本の特徴的な例を見てきたが，最後に，左傾本ベストセラー刊行元である世界社の書籍の装丁について触れておきたい。

世界社は，雑誌『改造』の記者であった饒平名（よへな）智太郎が 1926 年に設立した出版社である[12]。『改造』記者時代から第一次日本共産党の活動に関与した饒平名は，世界社設立後，左傾本を次々と刊行している。

図版 1　コロンタイ『赤い恋』奥付


昭和二年十月三十一日印刷
昭和二年十一月三日發行
昭和四年十一月十日　再七版發行
赤い戀
定價一圓六十錢
版權所有
譯者　松尾四郎
東京市牛込區市ヶ谷田町三丁目二十一番地
發行者　饒平名智太郎
東京市神田區中猿樂町七番地
印刷者　山内庄藏
發行所　東京市牛込區市ヶ谷田町三丁目二十一番地
世界社
振替東京七五一五八
電話牛込五八六八

本書の奥付によれば，1929 年の段階で 37 版を数えており，一大ベストセラーとなったことがわかる（図版 1）。

世界社の刊行物のなかで，おそらく最も発行部数が多かったのは，コロンタイ『赤い恋』（松尾四郎訳，1927 年）であろう。ソ連における新しい女性像を提示した本書は，刊行後，大きな反響をもたらし，増版に増版を重ねた。手元の本書の奥付によれば，1929 年の段階で 37 版を数えており，一大ベストセラーとなったことがわかる（図版 1）。

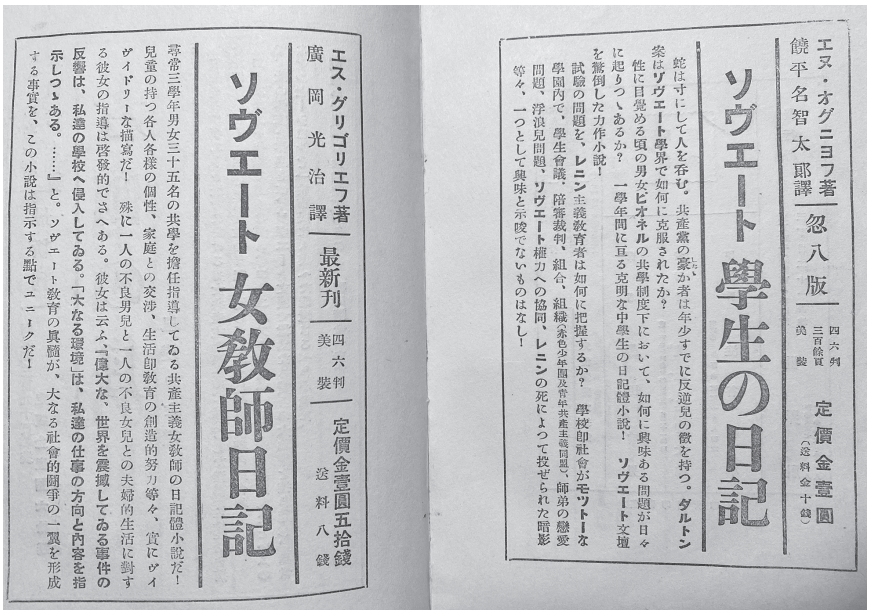
初版時の本書の装丁は柳瀬正夢の手による（巻頭 ii 頁⑦）。オレンジ色の表紙に赤と黒で印刷し，鎖に繋がれていた裸の人間が解き放たれ，穴から地上へ踏み出し，内側に槌と鎌が描かれた光り輝く五芒星に向かって両手を差し伸べる姿が描かれている。ソ連のシンボル，背景の工場，鉄鎖といったプロレタリア図像の常套句をちりばめた構成である。

本書は，増版のどの時点か定かでないが改装版（四六判仮綴本）が刊行された。手元にあるのはこの版のもので，装丁は村山知義による（巻頭 ii 頁⑧）。柳瀬とともに新興美術運動の旗手として活躍した村山は，1920 年半ばから次第に美術から演劇のほうに軸足を移した。しかし，装丁は柳瀬に次いで数多く手がけている。村山版では，左傾本に珍しく，けれどもベストセラーには相

(11)　永田一脩『プロレタリア絵画論』（天人社，1930 年）で，永田は，ソ連，ドイツ，ハンガリー，メキシコ，アメリカ，スカンジナビアのプロレタリア絵画の最新動向について紹介している。

(12)　饒平名智太郎の経歴について，櫻澤誠「戦後初期の沖縄知識人における歴史認識の再構築について――永丘智太郎を例に」『立命館史学』（27 号，2006 年 11 月）を参照。饒平名は拓務省嘱託となった 1937 年 7 月頃に永丘へと改姓した。

図版２　グミリヨフスキイ『ソヴエート大学生の私生活』掲載の広告



応しく赤と黒，茶の三色が用いられ，建物，一組の男女，犬，樹木，雲といったモチーフが抽象化して描かれている。空に輝く赤い星の下に女性が大きく描かれることで，ソ連における女性の生活が本書のテーマであることを暗示しているのだろう。

このベストセラー以後，世界社ではコロンタイの『三代の恋』（林房雄訳，1930 年）や『偉大な恋』（中島幸子訳，1930 年），マラーシキン『右側の月』（太田信夫訳，1928 年）などソ連の文芸書を続々と翻訳刊行し，それらを『赤い恋』叢書と呼んだ。叢書の巻末には，他の自社出版物の広告が掲載されているが，そこにはしばしば左傾本に稀な「美装」という惹句が付されている（図版 2）。

「美装」とされたエヌ・オグニヨフ『ソヴエート学生の日記』（饒平名智太郎訳，1928 年，四六判仮綴本）およびエス・グリゴリエフ『ソヴエート女教師日記』（廣岡光治訳，1929 年，四六判仮綴本）の装丁を見てみよう。

『ソヴエート学生の日記』は岡本唐貴装丁である（巻頭 ii 頁⑨）。小説の内容は，ソ連の共学制度下の中学生の一年間を日記仕立てで物語るもので，脇に教科書だろうか，本を挟んで並んで歩く一組の男女が表紙に配されている。本書でも赤，黒，緑と三色が用いられ，裏表紙に CCCP の文字とともに赤旗が舞うマークが付されている（巻頭 ii 頁⑩）。本扉の装飾文字も興味深い（巻頭 ii 頁⑪）。ポスター制作も重視していたプロレタリア美術運動では，メッセージを直截に伝える文字デザインにも意識が向けられていた。本書の文字にも，ロシアの装飾紋様を念頭に置いたと思われる魅力あるデザインが展開されている。

共産主義者の女性教員から見たソ連の教育現場を描く『ソヴエート女教師日記』の装丁は，誰の手によるものかわからない（巻頭 ii 頁⑫）。しかし，「美装」の惹句に恥じず，数ある左傾本装丁の

なかでも魅力ある一冊である。この表紙でも五芒星や鎌と槌，それに工場という左傾本に頻出の図像が描かれるが，鎌の円弧と呼応するように描かれたリズミカルな「女教師」の描き文字，五芒星から放出される輝く光の表現など，類型的な構成に留まらず，読者の目に飛び込んでくる。左傾本では贅沢な三色遣いが「美装」の根拠の一つだろうが，造形上の工夫とともに，新しい時代の到来を予感させる躍動感に溢れた装丁となっている。

本書の装丁も『ソヴエート学生の日記』装丁を手がけた岡本唐貴による可能性がある。同じく世界社刊行のグミリヨフスキイ『ソヴエート大学生の私生活』（黒田辰男訳，1929 年）という先の二冊と同シリーズといってよい書籍の装丁も岡本が手がけていること（巻頭 ii 頁⑬），それに，岡本デザインのポスター「新ロシヤ美術展覧会」（1927 年）に描かれた細身の鎌の描写や，CCCP の C の形状に「女教師」の描き文字と共通項が見いだせるからである（巻頭 ii 頁⑭）。そこから気づくのだが，「女教師」の文字を逆さにすると，そこには CCCP の文字が隠されているようにも見えてくる。

これまで見てきたように，プロレタリア美術家による左傾本の装丁は，ロシア構成主義を通過した写真の利用や文字図案の駆使といった新鮮な造形言語の導入により，そこに従来の書物とは異なる景色を生み出していた。こうした装丁が表出する「新しさ」をまとった左傾本は，幅広い層の若者たちに魅力的にメッセージを訴え，彼らを左翼思想という新たな世界へと踏み出させる一つの，しかし大きな扉として機能していたのだと思われる。

（きた・たかおみ　静岡県立美術館学芸員）

【謝辞】 本稿執筆に際し，漫画資料室 MORI 主宰片倉義夫氏より資料をご提供いただきました。また，法政大学大原社会問題研究所の中村美香氏より資料の閲覧，撮影でお世話になりました。ここに記し，謝意を表します。